第５回チーム会議

・「何か新しい世界がありそうだ」と期待させるような、魅力的で斬新なストーリーづくり、特に「言説の受容」、「実現性の喚起」を意識してほしい。
・最初から産業遺産ありきではなく、産業遺産にスポットを当てる意味、学ぶ意味を考察してほしい。
・「産業革命遺産は北海道近代化の原点であり、炭・鉄・港を担ってきた空知地域・小樽・室蘭を中核としてオール北海道で原点に立ち返り、先人の力、勇気や知恵を共有することで、北海道の新たな可能性につながるヒントが見えてくるのではないか」という見せ方もある。
・景観重要建築物は突破口になると思う。北海道の産業革命遺産の景観を象徴する新たな造語（例えば、近畿大学の岡田教授が造った「テクノスケープ」など）を提唱してもよいのではないか。
・例えば、文化庁の日本遺産は近代遺産が登録しづらい制度になっているが、北海道遺産は、５２件のうち１９件が近代関連となっているように、北海道らしい仕組みをチャレンジしている。このような骨太なエッセンスの部分をしっかり書いた方がよい。
・「明治日本の産業革命遺産に北海道の産業遺産が選ばれないのはおかしい」などといった世論を喚起するために日本遺産を活用するというストーリーを戦略として考えてもよいと思う。

（２）ＪＴＢ北海道・萩野部長（第２回検討会／H27.9.14）

観光を巡る動向

・欧米では歴史ある建物等の観光転用が当たり前の考え方だが、日本では先ず保存という考え方が支配的だった。一昨年に観光庁と文化庁が連携協定を締結し、ようやく文化財の観光転用に向けた動きが出てきたところ。
・一般的な観光はマーケティングや付加価値の向上が困難で、交流人口の増加にもつながりにくい。スポーツ観光、産業観光、グリーンツーリズムなど、観光テーマをゼグメント化して推進していくことが非常に重要。
・日本の観光競争力は世界ランキング９位と上昇傾向にあるが、地方都市（ゴールデンルート以外）は、情報発信、受け入れ体制の整備について改善余地がある。

北海道観光の動向

・インバウンドの国別状況を見ると、全国と比較して、アジアのシェアが高い傾向にある。
・オリ・パラに向けて、滞在が長く消費額も大きいヨーロッパや北米からの誘客が重要。
・北海道の強みは都市機能と地域を併せ持っている点であり、国内でこのような地域は少ない。
・今後、入込客数を増やすためには、旅行者のニーズをきちんと汲み取り、自然・食・温泉以外の新たな仕掛け、前例にとらわれないマーケティング等が必要。

北海道ミュージアム構想に関して

・従来の「自然」と「食」だけでは質の向上やマーケットの広がりが期待できない。歴史・文化の観光資源を掘り起こして世界に発信することが非常に重要。
・外部・専門家の目利きが重要。マーケットに近い人たちに来てもらい、ブラッシュアップすることが重要。
・持続的な観光地経営においては、経済価値、希少性、模範困難性のほか、マネジメント組織の

存在が重要。

その他

・台湾などからの観光客については、（歴史・文化などを活用して）リピーターに訴求していく戦略も必要。

・専門知識（地元だけの特別な情報等）を持ったガイドの養成を、いかに短時間で行うかが課題。

・従来型のパンフレットは、Ｗｅｂ等の情報と整合性がとれていないので、プロモーション全体をマネジメントする必要がある。

（３）北海道博物館・石森館長（第４回検討会／H27.12.11）

・新たなビジネスチャンスにつなげていけるかどうかが大きなポイント。

北海道遺産について

・他の都府県に先んじた制度であったが、人的・資金的な面で課題を抱えている。

・資金面の課題について、イオンなど包括連携協定企業の寄附を活用することで、何とか活動できている状況。

・単体ではなくストーリーでうまく組み合わせることで、よりよいプロモーションができれば、従来にはなかったチャンスが生まれる可能性がある。

・（北海道遺産のように）北海道と包括連携協定を結んでいる企業を有効に活用するべきであり、このプロジェクトについても活用できる可能性はある。

観光への活用について

・文化財全てを観光に活用というのは行き過ぎだと思うが、ビジネスマインドは必要。

・地域の宝を大切にするのは当然のことであり、日本遺産や世界遺産を目指す中で、それをきっかけとしてヘリテージビジネスにつなげていく必要があるが、旧来的な意味での観光（旅行業、宿泊業、運輸業主導）であってはならない。

・地元の誇りやアイデンティティを確認するとともに、ビジネスチャンスにつながる取組になるとしたら、この空知総合振興局の提案は大いに意味がある。

地域の受け皿について

・地域資源を新たな形で活用していくのであれば、新たな地域法人が必要になると考える。

・そういう意味では、「そらち炭鉱の記憶マネジメントセンター」は、ＤＭＯ的な役割を果たす可能性が十分にあると思う。

日本遺産について

・北海道からは申請すらなく、北海道・東北の認定件数はゼロ。

・シリアル型・ネットワーク型の要素を含む空知総合振興局の提案に関しては、ストーリー性を重んじる制度である日本遺産を目指すというのは正解だと考える。

若者（子ども）の啓発について

・北海道が抱える最大の問題は、若くて優秀な人が北海道を離れていくこと。

・プロジェクトの内容を子ども達にもきちんと理解してもらうことが重要。

その他

・アジアなど海外に対して有効な情報発信のツールとなっている「北海道 Likers」など、SNS をうまく使えば、あまりお金をかけずに効果的に情報発信することができる。

（４）東京大学先端科学技術研究センター・西村教授（第６回検討会／H28.2.18）

北海道と九州の産業遺産について

・空知地域の炭鉱遺産などは規模が大きく多くのものが残っている。
・九州では炭鉱住宅がなくなっており、炭鉱・鉄道・港のセットで登録できないことを残念がった。ストックでみると負の遺産だが、ストーリー性では都市の個性になる。
・産業の発展と都市の発展がリンクして発展していることは珍しくないが、ともにゼロから発展している純粋型で発展している北海道は珍しい。

世界遺産の動向について

・当初の世界遺産は産業技術の発展にフォーカスが当てていたが、今は、社会にどう影響を与えているかに変わった。モノ主義から変わった。
・産業遺産の活用に広がりがみえており、見方を変えることが大切。

遺産の活用について

・遺産の活用に当たって、ストーリーは重要。ストーリーは誰かがライターになるのではなくて、本気で事実を調べ、深めることが大切。
・子ども達は社会科などでクールに理解している。子ども達のエネルギーを引き出すことが大切。
・炭住など負の遺産とされているものであっても、遺産の事実を調べること、評価することは次の時代を考える手がかりになる。

その他

・多くの北海道の都市は、ゼロから造られた点が特徴。都市の構造と産業の発展の関係性を視点としてストーリーを想像するのも面白い。

３　まとめ

世界遺産登録に沸く九州地域では、登録を機に、新たなビジネスチャンスの創出によりコミュニティが活性化し、地域に誇りを持ってガイドする方々の姿が印象的であった。登録に向けては相当の期間や作業が必要となるが、調査を通じて、産業遺産が持つ負のイメージ払拭や、地域活性化のきっかけにつながることを体感することができた。

また、有識者からは、「炭・鉄・港」の空知地域、室蘭、小樽には、九州地域等の「明治日本の産業革命遺産」と同種・同等の産業遺産が存在しており、その特色として、①多くの遺産が残存かつ大規模、②九州地域等の倍速のスピード（約 30 年間）で産業革命を達成、③コンパクトなエリアに一括して存在、④近代において産業を基本とした都市計画がゼロから発展、等といった特色が挙げられた。

先進事例及び有識者から得られた示唆を整理すると下表のとおりであり、産業革命遺産の保全・活用に関するグランドデザインの理念や具体的な戦略を検討に際して十分留意する必要がある。

表３－３　先進事例調査を通じて得られた示唆（ポイント）

分　類		今後の取組への示唆
九州地域		
	福岡県北九州市	・稼働中の産業遺産は、景観重要構造物として指定し保全することで、世界遺産の構成資産となった。 ・製鐵所跡の東田第一高炉跡は世界遺産の構成資産から漏れたが、地域のシンボル的施設であるため、史跡として保全・活用されている。 ・ものづくりの現場の見学・体験や、工場夜景、近代化遺産などの集客素材と他の観光素材との組み合わせたツアー等の活用を通じて「産業観光」を推進している。
	長崎県／長崎市	・産業遺産を観光資源として活用し、観光メニューを多様化するための一手段として、世界遺産に取り組んでいる。 ・産業遺産を束ね、ストーリーを作ることで価値を創出した。産業遺産の価値をしっかりと評価し、発信していくことが重要。 ・世界遺産の長崎造船所は稼働資産（文化財保護法の対象外）であることから、景観重要構造物として保全。同じく世界遺産の小菅修船場は史跡指定し、保全・活用している。
	福岡県大牟田市	・世界遺産登録は通過点であり、マチが元気になることが目指すべき方向性。 ・地域が豊かになるためには、住民が地域への誇りや自信を持つことが必要。 ・三池港は石炭を運ぶシステムの一つとして世界遺産の構成資産となっている。 ・三池炭鉱宮原坑は市の所有であり、文化庁のフレームの中で保全している。 ・小学校の副読本に炭鉱や三池港の内容を盛り込み、学習に活用している。 ・子どもや町内会長等を巻き込みながらイベントを実施することにより、産業遺産の保全・活用に向けた気運醸成を図っている。
	熊本県荒尾市	・三池炭鉱万田坑は、世界遺産登録を契機に、地域の方々が産業遺産を歴史的・文化的に価値がある“地域の宝”と認識し、草刈りや清掃等を率先して実施するようになった。 ・世界遺産登録は通過点。観光資源としての価値を高めることで「ヒト」「モノ」の交流の拡大を図り、新たなビジネスチャンスにつなげていくことが重要。
	鹿児島県	・世界遺産登録に向けた動きは、鹿児島県主催で「九州近代化産業遺産シンポジウム」を開催し、九州が一体的な保全と活用をうたった「かごしま宣言」を採択したのがきっかけ。 ・地元ガイドの育成や展示方法の工夫等により、産業遺産が魅力的に発信されている。 ・北海道には往時の仕事や産業の仕組み、マチのことを知っている方がたくさん生きており、これらの遺産を継承することで、“地域の宝”となり得る。
ドイツ・ルール地方		・地元の方々が産業遺産を地域の誇りと認識し、産業遺産の付加価値向上により、地域の再生を目指している。 ・インダストリアルネイチャー（産業的自然：人工の産業構造物と自然回復状況をありのままに見せる取組）の導入等により、産業遺産をできる限り保全し、さらに新たな価値を付加して、様々なスタイルで活用する。

表３－４　有識者から得られた示唆（ポイント）

有識者	今後の取組への示唆
札幌国際大学 吉岡教授	・観光はあくまで手段であり、最終的な目的は“よいまちをつくること” ・今後は「地域にあるものを活かして顕在化する」ことが重要。 ・産業遺産はある程度の知識が無いと好奇心が沸かないテーマであるため、知識を提供する仕組みづくりが必要。 ・今この時期に産業遺産にスポットライトを当てる意味、学ぶ意味の考察が必要。 ・北海道の新たな可能性につながるヒントを示すべき。
ＪＴＢ北海道 萩野部長	・入込客数を増やすためには、旅行者のニーズを汲み取り、自然・食・温泉以外の新たな仕掛け、前例にとらわれないマーケティングが必要。 ・観光テーマをセグメント化（スポーツ観光、産業観光など）して取り組むことが重要。 ・インバウンドについては、歴史・文化を活用してリピーターに訴求していく戦略も必要。 ・専門知識を持ったガイドの養成を、いかに短時間で行うかが課題。
北海道博物館 石森館長	・産業遺産を新しいビジネスチャンスにつなげていくことが重要。 ・ストーリーでうまく組み合わせることで、よりよいプロモーションができれば、従来になかったチャンスが生まれる可能性がある。 ・文化財全てを観光に活用するのは行き過ぎだと思うが、ビジネスマインドは必要。 ・プロジェクトの内容を子ども達にもきちんと理解してもらうことが重要。 ・ＳＮＳをうまく使えば、効果的に情報発信することができる。
東京大学先端科学技術研究センター 西村所長・教授	・北海道の産業遺産は、九州と比べて近代的で規模が大きく、残存しているものも多い。さらに自然との調和が図られている。 ・炭鉱住宅はストックでみると有効活用されていない“負の遺産”だが、都市の個性につながるストーリー性を持っている。 ・多くの北海道の都市は、産業と都市がいずれもゼロから発展している点が特徴。都市の構造と産業の発展の関係性を視点としてストーリーを想像するのも面白い。 ・遺産の活用に当たって、ストーリーは重要。ストーリーは誰かがライターになるのではなくて、本気で事実を調べ、深めることが大切。 ・子ども達は社会科などで産業遺産をクールに理解している。子ども達のエネルギーを引き出すことが大切。

第４章　明治北海道の産業革命遺産等の保全・活用に関するグランドデザイン

１　グランドデザインの必要性と考え方

（１）北海道の産業革命遺産等の保全と活用に関する課題

北海道の産業革命遺産等は、近年、施設の老朽化が進み、当時の様子を伝える映像や写真が劣化するとともに、地域の語り部の高齢化が進んでいる。また、地域の拠点施設である博物館等の一部は休館を余儀なくされている状況にあるなど、遺産の保全と活用にあたって、多くの課題を抱えている。

（２）先進事例調査及び有識者からの示唆

前章で整理した「先進事例調査及び有識者からの助言」から得られた示唆について、グランドデザイン等の検討に当たって参考とするため、次のとおり５つのポイントに整理した。

■Point1　産業革命遺産等は「地域の宝」

「炭・鉄・港」ストーリーを構成する遺産は、視点を変えると「負の遺産」と受け止められる場合もあるが、産業の振興、地域の発展そして日本の近代化に貢献した歴史も踏まえ、「地域の宝」であると再認識することが重要である。また、往時のことを知る地域の人々も同様に「地域の宝」であると認識し、次の世代に継承していくことが重要である。

■Point2　地域にあるもの（潜在的な資源）を活かした強みの顕在化

バブル期のテーマパークのような地域資源が十分に活用されないハコモノに過大な投資をするのではなく、ドイツの事例のように、地域に現存する遺産をできるだけ「ありのまま」で保全し、新たな価値を付加して様々なスタイルで活用することが重要である。

■Point3　好奇心を持つためには一定の知識が必要

産業遺産等に好奇心を持つためには、一定程度の知識が必要であると言われていることから、必要な知識を提供する仕組みづくりが重要となる。「炭・鉄・港」に関する知識を持ってもらうことによって、遺産の価値を次の世代に伝えていく効果だけではなく、「炭・鉄・港」ストーリーに沿った広域的な交流人口の増加も期待される。

■Point4　ストーリーの構築は事実の深化

「明治日本の産業革命遺産」の世界遺産登録に当たって鹿児島県九州近代化産業遺産研究委員会における様々な視点（分野）による史実研究の貢献が大きかったように、「炭・鉄・港」ストーリーの構築に当たっては、複数の学識者等で構成する研究会を設置し、「産業の発展と都市形成の関係性」や「明治政府による日本の近代化のテストプラント」など多様な視点を加えた事実の検証により、より立体的で魅力あるストーリーを構築することが重要である。

■Point5　歴史・文化を活かした「観光の質」の向上

従来の食と自然といったコンテンツだけではマーケットの広がりに限界があることから、観光の質をより高めるためにも歴史・文化に関する資源を掘り起こし、情報発信することが必要となる。北海道は、縄文文化やアイヌ文化などの独自の歴史・文化に加えて、特色のある産業革命遺産等を各地に有していることから、これらの遺産を活用することが重要である。

（３）北海道全体のグランドデザインを作成・推進する必要性

北海道（空知地域、室蘭、小樽など）には、九州地域等の「明治日本の産業革命遺産」と同種・同等の遺産が存在しており、「明治日本の産業革命遺産」と比較しても、以下の観点から世界的に珍しい地域であると言える。

① 近代的で規模が大きく、かつ数が多く残っており、自然と調和しているものも多い

② 約 30 年間（1880 年頃～1910 年頃）という「明治日本の産業革命遺産」の九州地域等と比較して倍速のスピードで産業革命を達成している

③ 遺産が、約 150 ㎞の比較的コンパクトなエリアに存在している

④ 産業振興と一体となった都市形成（計画）がゼロから発展を遂げているケースが多い

日本の近代化に貢献したこれらの遺産の歴史的意義や価値を学術的に評価し、保全・活用することは、道民が北海道の歴史や文化、環境を守りつつ、誇りを持って持続可能な地域づくりを担っていく上で、大きな意義がある。

今後、具体的に取り組んでいくためには、産炭地域（空知地域）の枠を越えた広域的でより魅力的なストーリー性の構築を目指すとともに、教育、文化、産業、観光そして都市計画・景観など幅広い観点で検討し、総合的かつ分野横断的な検討・取組をオール北海道で中長期のスパンで推進することが重要であり、関係者の取組指針となるグランドデザインを作成する必要がある。

また、本稿では、「炭・鉄・港」ストーリー（空知地域、室蘭、小樽）を切り口とした持続可能な地域づくりについて検討するが、明確な目標とその達成に向けた手順をグランドデザインとして提案することによって、軽工業や農林水産業など他の産業振興ストーリーと一体となって発展してきた地域がモデルケースとして活用するためのヒントとなり、北海道全体の持続的な発展につながることを目指す。

2　基本理念

先進事例調査や有識者からの助言等を踏まえ、グランドデザインの基本理念を次のとおり設定した。

【基本理念】

- 産業遺産等や人を「**ありのまま**」に守り、継承・活用する
- **ストーリー性**（「炭・鉄・港」トライアングル）にこだわる
- **シビックプライド**（そこに住む人々の誇り）を大切にする
- 地域コミュニティとの**協働**で取り組む
- **オール北海道**による具現化を目指す

3　目指すべき将来像と目標

【目指すべき将来像】　地域活性化の芽を増やし「持続可能な地域」へ

空知地域には、約 110 もあった炭鉱の閉山に伴い、ピーク時の人口の 3 分の 1 にまで減少するという大きな経験をした。（4 分の 1～10 分の 1 になった自治体もある）今後、人口減少という負の状況下にあっても「持続可能な地域」を維持していくためには、地域資源を「地域の宝」であると認識し、地域の人々が「シビックプライド（＝そこに住む人々の誇り）」を持つことで、新たな価値（強み）を発見し、それが地域内外のヒト・モノ・カネの交流を活発にすることで、地域活性化の芽を生み、マチが元気になるという好循環を生み出す必要がある。

こうしたことから、本グランドデザインでは、地域活性化の芽を増やすことによる「持続可能な地域」を目指すべき将来像とし、この将来像を実現するための目標として、３つの目標を掲げることとする。

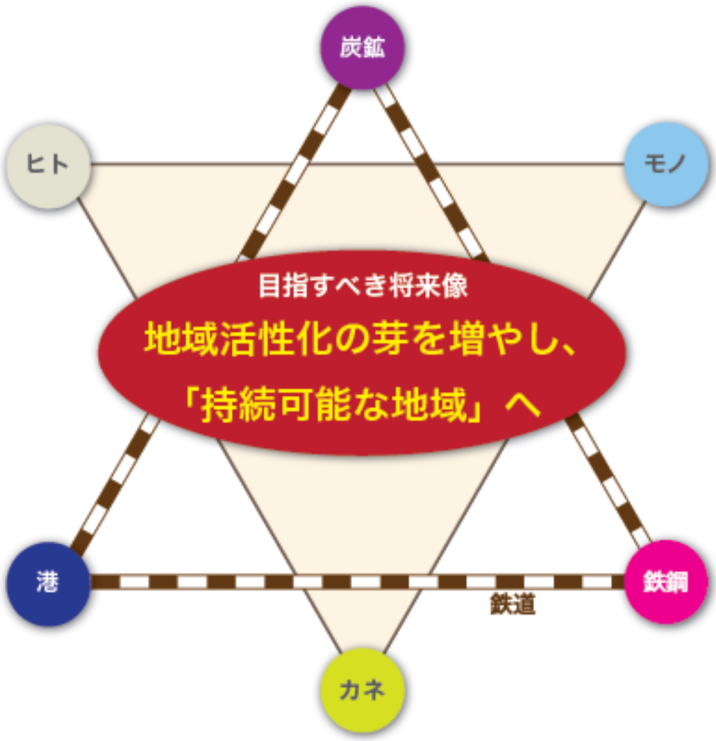

図４－１　グランドデザインの目指すべき将来像